

民主主義へのジェファソンの「信仰」

近代アメリカの「過大な期待」と、プラグマティズムの切迫した楽観主義

谷川嘉浩(京都大学)

政治学者のウォルター・リップマンは、*The Phantom Public*において、人民主権という神話を攻撃している。この社会には知るべき問題が無数にある。国際情勢、地域の犯罪、公教育、政治家の不正、水道の問題……挙げればきりが無いほどだ。市民は、これらの問題について情報を持ち、自分なりに考え、ひとかどの意見を持つことが期待されている。少なくとも、民主主義の神話はそのように作られたとリップマンは考えた。民主主義は、「過大な期待」を人間に寄せているのだが、人間にその課題をこなす能力はないと彼は結論付けた。

ダニエル・ブーアスティンは、プラグマティズムの社会哲学に共鳴しており、政治史や政治思想に通暁した歴史家である(*The Decline of Radicalism*など)。「消費の時代に『理想』を再構築すること——ブーアスティン、デューイ、ニューバー」(『人間存在論』23号 139-150 頁、2017 年)で扱った通り、ブーアスティンは、消費社会論として有名な著作 *The Image* において、消費社会が「途方もない期待」によって特徴づけられると論じている。産業は消費者の欲望を煽り、消費者の方も、消費を通じてどのような期待も満たされると信じているのだ。

興味深いことに、ブーアスティンは、消費社会の到来は極めてアメリカ的な問題だと考えていた。というのも、アメリカ建国以来の「民主化(democratization)」の展開の一つとして、消費の時代が存在しているからである(Yoshihiro Tanigawa, "Is Daniel Boorstin a Bad Example?: Taking *The Image* Seriously", *Proceedings of the International Conference on Future of the Past*, pp.645-660, 2018 August)。*The Image* において、アメリカ民主主義の歴史に消費社会を位置づけた箇所、興味深いこと、ブーアスティンはリップマンに言及する。リップマンは、*The Phantom Public* において、民主主義の神話——過大な期待を前提とする民主主義という観念——を創設した人物として、トマス・ジェファソンを批判しており、ブーアスティンは、これを自身の見解を代理するものとして引用し、当時の政治的・社会的状況に不満を表明しているのである。

要するに、リップマン＝ブーアスティンは、過大な期待を前提とするアメリカ社会に不健全なものをかき取り、そうした神話を作り出した人物をトマス・ジェファソンだとみなして批判しているのだ。本発表の議論の前半は、こうした問題系を描き出すことにあてられるだろう。

ここで注目し値するのは、リップマンとブーアスティンの双方が尊敬を払っていた、ジョン・デューイのジェファソンに対する言及である。1940年に公刊された *The Living Thought of Thomas Jefferson* 収録の "Presenting Thomas Jefferson" などで、デューイは、ジェファソンら建国の父たちの時代と現代とでは、様々な条件が違っているということを繰り返し指摘し、また、ジェファソンのレトリックに絶えず不満を表明している。それにもかかわらず、民主主義のために戦ったジェファソンに、ある普遍的な訴求力を見ていたデューイは、民主主義への彼の「信仰(faith)」を中心に、ジェファソンの再評価を試みている。

そもそも、デューイは、1934年に公刊された *A Common Faith* において、理想が私たちの行為選択に持つ力を認めるという脱宗教化された形で、「信仰」を再定義している(拙稿「*A Common*

Faith はなぜそう呼ばれるか」『アルケー』25号 67-78 頁、2017年)。デューイの最も有名なエッセイ "Creative Democracy: The Task Before Us" (1939) において、「民主主義というのは、人間本性の様々な可能性への生きた信仰(a working faith)によって統制された生き方のことです」と述べたのは、この「信仰」概念に基づいているのである。

ここで重要なのは、以上のような「信仰」概念が、ジェファソンの民主主義に対する姿勢を表現するために用いられたことである。1939年の *Freedom and Culture* や前掲の "Presenting Thomas Jefferson" においてデューイが注目するのは、人びと(people)に等しく権利を認め、統治の最終的なコントロールを彼らに委ねることにジェファソンは「恐れ」を感じなかったことである。恐らく、ここにジェファソンの「信仰」の楽観性を読み取ることができる。もちろん、ここで「楽観」と言ったのは、長らく、プラグマティズムの社会哲学に貼られてきたラベルを想起させるためである。

平等への積極的なコミットという観点からすると、デューイは、ジェファソンをウィリアム・ジェイムズに重ねていたと推測される。この二重写しによって示唆されるのは、デューイのジェファソンの「信仰」に見られる前向きさを「楽観」と呼ぶとすれば、それは、「切迫した楽観性(urgent optimism)」と表現されるべきだということである。

要するに、本発表の後半では、前半では素朴に批判されたジェファソンからデューイが再構築しようとした「遺産」を検討し、その再評価が持つ積極的な意義が示されることになる。

本発表を違う観点から見てみよう。リップマンとデューイの思想という、教育学や政治学などの分野では、デューイ＝リップマン論争に基づく議論が支配的である。社会が複雑化する中において、デューイは、困難を承知で市民参加の重要性を説いたのに対して、リップマン専門家の役割を強調したとされ、論争は後者の勝利に終わったとされる。

実際には、リップマンは、*Public Opinion* において、デューイに批判的に言及することがないし、デューイの心理学的業績に依拠して議論を進めてすらいる。一方デューイは *New Republic* で「論争」を構成するとされるリップマンの書籍のレビューを書くのだが、終始リップマンに好意的である。デューイの政治哲学的著作 *The Public and its Problems* でも、リップマンの時代診断の巧みさを褒め称えてすらいる。しかも、デューイが常連寄稿者だった *New Republic* の立ち上げには、リップマンが関わっていたのだ。こうした周辺的な情報からも、デューイ＝リップマン論争の虚構性が窺える。にもかかわらず、リップマンとデューイを比較する先行研究の大半は、虚像であるはずの論争の枠組みに絡めとられ、テクニカルに根拠がない議論を反復している。

筆者は、この論争が虚像であることを明らかにした上で、両者の理論的共通項である先入見を比較検討した(『リベラリズムは豚を焼くために納屋を燃やしてしまった』——リップマンとデューイの先入見論、日本デューイ学会第61回大会、2017年9月17日)。そこで示されたのは、先入見という観点から見て、リップマンが、デューイ心理学を読み替えた結果、自縄自縛に陥ったのに対して、当のデューイは、そうした陥穽を免れていたことである。この発表では、具体的に追跡可能な影響関係を元に両者を比較していた。それに対して、本発表では、そうした成果を踏まえながら、アメリカの建国の父たちの一翼を成すトマス・ジェファソンからの距離を測量することで、両者の市民や民主主義に対する描き出すものと位置づけられる。